

Title	高橋幸八郎著 近代社会成立史論
Sub Title	
Author	宇尾野, 久
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1947
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.40, No.6 (1947. 6) ,p.353(47)- 360(54)
JaLC DOI	10.14991/001.19470601-0047
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19470601-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の全體の記録・規約等が明かでないから、その全貌を明かにすることが出来ず、甚だ遺憾ではあるが、同仲間組合の商業的特質は、これを窺知することが出来よう。勿論比較的な問題ではあるが、他の江戸における仲間組合に比して、組合員の経済的協力性が強い方であるといふことが出来よう。

(昭和二十二年七月九日稿)

高橋幸八郎氏著「近代社會成立史論」

宇尾野久

高橋幸八郎氏の近著「近代社會成立史論—歐洲經濟研究史」(日本評論社版)に接して得た感想を私は同書の編別に從つて書き綴る。先づ「序言」「方法的」立場について」から。

著者高橋氏が、史料の重要性を正當に評價しつつもいわゆる「史料の奴隷」として實證主義、客觀主義の框内に踞することを峻拒せられるのわ全く正しい。史學を決して史料學そのものでない。(ラムデレヒトの見解—歴史研究と歴史記述との峻別—参照)史學の發展は正にその遺産の正統な(科學的な)開拓者によつてのみ前進せしめられる。一ところのサヴェーント史學がボクロースキによつて偏向せしめられたのたまふに於ける史學の狹隘化にあつた。レーニンが「吾々如何なる遺産を拒否するか?」(一九四五年レーニン著「ラド」發行)の小冊子の中で次のやうにのべてゐる。「啓蒙者わ、たとへ彼に固有な矛盾をみつめなくとも、一定の社會的發展を信ずる。ナロー・ドニキわ、彼が、すでにその矛盾を認めても、一定の社會的發展から尻込みをする」と。著者わすでにヨーロッパ史學の遺産

近代社會成立史論

を繼承されるに當つて發展さるべき矛盾「發展と對立物の「闘争」である。レーニン全集十三卷三〇一頁」が自己の遺産の中に存在すること更にその遺産の矛盾の發展から尻込みしてわならぬことを最初に明示せねばならぬ。

著者わマルク・プロッホのいわゆる「歴史を逆に讀む」逆行的方法(méthode rétrograde)を歴史學の論理水準の高揚として居られる。(序言八頁)私はかつてプロッホのこの箇所につき當つた際にマルクスの次の言葉を思ひ出して今更乍らマルクスの偉大さをしのんだ。「人間の解剖は猿の解剖に對する鍵である」(經濟學批判)と。又これと同様に前掲のマルクスの經濟的範疇についての理解の方法もこのことをうら付けるものである。そしてこの事が妥當性をもつてのわ人間社會のフォルマツ・イオンが前進的な系列を成してゐることに由來する。(ヴェラ・ザスリツチ宛の手紙)

著者わ更に東洋世界、アジアの歴史的生產社會の「つたる日本」の封建構成に對して、「恐らく純粹に封建的なものではない」(序言一四頁)と言つて居られるが、封建社會の申し子のやうに考えられてゐたゲルマン封建社會についてのトムソン教授の指摘(J. W. Thompson, Feudal Germany, p. 292)又はジョージ・バートン・アダムスがエンサイクロペディア・ブリタニカ十一版で封建制度を「様に典型的に解すべからざる點

を指摘した事、その外 Joseph Calmette Le Monde Féodal. Petit-Dutailis, The Feudal Monarchy in France and England 1936, 等々を考へ合せる時、著者が「特殊な市民的偏見」として拒否された「ヨーロッパ中世の土地所有の歴史記述」(1) にかわる「古典的に純粹な世界史的段階構成の指標」(序言一四頁)が、それが「類型學」の手法又方法論をとる限り困難なものなり、かくて上原博士の指摘された如く(獨逸中世史研究、一一四頁)、新見博士にみる如き封建社會の概念の西洋への輸出(2)の要求を生ずるに至る。

今後著者の世界史的段階構成の研究が、いかに進むほど「類型」學の monotony わよしそれが如何に精緻なものであらうとも激しい生活體驗をもつ若き學徒にわすに納得され得なくなるのでわなからうか？

- (1) 土地所有の問題が封建社會の最も本質的部分であるがなをその全部でわなない。
- (2) スターリシンの人類社會史の基本的發展段階の時代分けに就いての要求わ之等の類型又わ類概念の講壇的規定とわ決定的に相違する。

次に第一編、ヨーロッパ資本主義の國民的「類型」現代歴史學水準への「視角」について。

フランス大革命を「農民革命」と規定する近代フランス史學

わ正にフランス革命のブルジョワ的性格を浮彫にしてゐる。フランス「ブルジョワ革命」それわクロボトキン(言うやうに「幾世紀もかゝつて地中に根を下ろし、最も熱烈なる改良家たちでさへも、その著作中にそれを攻撃することを取てなし得ないほどに、確かりと動かし難く見える所の制度の僅少年間に於ける迅速なる顛覆である。」

かつてレーニンが「九〇五年の革命の前夜にロシア社會を科學的に検討した時、ロシアのツァーリズム、封建制度に對する徹底的な究明と革命の眞の擔い手並びにそれをうみ出しつゝある資本主義の發展とを明確に多き出した。その際レーニンは、まづ最初に封建制度の性格をその發展、漸進的崩壞の過程に於いて捉え、その内部における資本主義的關係の發生を明かにした。

その際、問題となつたのは、資本主義制度の類型的講成でわなない。そこでわ封建社會の矛盾の所産としての資本關係の誕生であることを忘れてわならぬ。

マニフマクチュア時代に於いてわ資本わいまだ「規定者」とわならぬ。だが資本わマニフマクチュア時代の構成的矛盾の中點たること忘れてわならぬ。この點を没却すると、この時代の國家權力の性格把握わ混沌の淵に顛落する。レーニンのわ de facto としての階級分化に注意してゐる。一發達、邦

譯、下巻、聖頁。

ロシア封建社會を特徴付けるミール、それはもはや近代的物神を防ぎとめる唯一の城塞でわなかつた。土地貴族(それにもまして東洋專制主義「ツァーリズム」)の慾意とミール内部でのブルジョワ的諸關係の發生わすにロシア社會を絕對的にも(農業生産力の減退「エンゲルス」相對的にも(農民層の分解)窮乏せしめてゐた。ロシア社會の危機人民の不幸わこれのみに止まらぬ。封建的階級が資本主義的階級の道具に轉化した時、窮乏と困亂わ正に言語に絶したものとなる。(クロボトキン「一革命家の思ひ出」大杉榮譯)かゝるブルジョワ、地主的階級のロシアの野蠻な袋小路に對して行われた農奴解放が地主にとつていさゝかの利益の喪失も勘定に入らぬことわもはや明白な事實である。(ウイリナ總督ナズイモフに與えられた解放に關する勅書。參照。)洗練された資本の強靱な國々の美事な革命の類型の中でわなしに資本主義の最も遅れた國々での弱いがしかし無遠慮な資本、及びツァーリズムの振舞の中に革命わ最もその本質的な面を曝露した。(1)

それにもかゝらずフランスわ正しく革命の祖國である。著者の優れた闘魂が、進歩的な眞理究の熱情が、問題の核心え鋭くメスラつきさしてゐる。

- (1) かゝる相違の對照を明確に示したものとて、スターリ

近代社會成立史論

ン「レーニン主義の基礎」五、「農民問題」參照。

「第二編、所謂農奴解放に就いて」封建的土地所有の本質並びにその變質過程」について。

「フランスは、周知の如く、中世封建制度の典型であると同時に近世絶對主義の浮彫であり、而もかの大革命に於いて舊制度を廢棄し、近代社會を創造した點に於いて、何れの國にも比類なき古典と純粹さを示した。

この故に、吾々は多くの事實をフランスに於いて求めるであらう。(二四頁)だがこのことが云われ得るためには、著者わ史學のいわゆる「冷厳な作法」の故に前掲のトムソンその他の人々の批判に應えねばならぬ。

この場合コスミンスキを「類型學」の引合ひに出すことわ間違つてゐる。コスミンスキわ正當にも「紹介者の意圖如何にかゝらず」典型的莊園の形成、崩壞の問題を封建的土地所有者層の分化の問題として提起してゐる。(四〇頁)このことわ土地關係の最も本質的な部分たる地代形態、從つて地代のトレーガーの階級構成の問題に迄發展する。

そこで著者わ言う、「とほいへ、把握わ(Gesamtanfassung)になされねばならぬ」(二四頁)と。だが全面的把握とわ個別研究の反指定でなければならぬ。勿論それは落帖ある累積を意味するものでわなない。(1)

著者も續けて「本稿は所謂社會經濟史學派への批判接觸點及び限界點」に一つの力點がおかれる。ちなみに、近代國民運動史序説の「齟齬たるものである」(二四頁)と。だが問題の本來の「闘争の場」(論争點)で決せられねばならない。何故なら問題の發展(政治的)擴大(正にこの「闘争の場」の中で諸々の矛盾を萌芽するからである)。

マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンを貫く世界史形成の問題提起こそ正に社會經濟的「類型」學の要請とわ眞反對に「近代國民運動」(「革命」史の展開として出發する)。

フランス革命の序曲もやはり著者が正しく指摘されたやうに「所謂農奴解放」と呼ばれるものであった。「所謂」とわかつてA・ドーブシがDie sogenannte Unzeit(Grundlage, Teil. S. 53)と述べた際の洞徹な「用意」(上原博士「獨逸近代歴史學研究」九三頁)というよりも「農奴解放」が、名實、正に相反する事に對する著者の鋭い洞察に由る。著者わ、正に眼光を紙背に徹しつゝ「農奴解放狀」の内容をばくろし、「解放」とわ「農奴」と「自由」を「交易する」(五二頁)ことであつたことを明快に指摘されてゐる。だがそれわ、同時に「領主制的土地所有」(「莊園」のタイプの地域的

相違並びにそれを反映する農氏層の分解、農村ブルジョワ、近代市民層等の成立による構造轉換を析出しつゝ、フランス絶對主義の政治的要求との相互滲透運動に在いてその物質的構造の近代的裝置轉換過程を明確ならしめる事によつて具體化される。

この際重要な事わ絶對主義の史的な、一般的法則をもつてフランス絶對王政の性格を一色に塗りつぶさぬことである。

「特殊性わ一般的規定の複合」であるといふのはわ誤つてゐる。歴史に在いてわ一般者が特殊を通じて具現するのでありかくて具現した一般者が特殊により強く制縛されることが問題なのである(3)。

「類型」學的な典型の複合又わ組み立てが直ちに歴史を形成するものでわない。

(1) だが史的唯物論わたい本質的なもののみを研究して、偶然的なものを研究しないといふやうな狹隘さわみじんももつてゐない。永田廣氏譯「唯物論と經驗批判論研究」169頁。それどころか、イリシワあれ程抽象的な哲學の問題を論ずるに當つてもなを生活から一步も遊離してゐない事を明記すべきだ。

(2) 土地所有わ莊園社會の最も本質的な部分であるが、領主、莊民の對抗關係わより廣汎である。

ブロック及びユスミンスキーわ領主の慈意又わ意思のインシアキーク認めることによりこの過程を具體的ならしめた。

(3) 史的唯物論わこの過程を對立物の相互滲透性「矛盾の發展」とゆう姿に於いて捉えてゐる。

この過程わ絶對權力自體に於ける矛盾から、物質的構成に於ける對立、更に國內、國外的對立に到るまで革命(構成的矛盾の集中)に於いてその中點を露呈する。史的法則わあく迄も自己を貫徹する。しかしかゝる法則を貫徹せしめるものわ闘争する物質的階級的人間である。

「第三編 封建社會解體への『對照』に就いて——絶對主義成立への連繫」について。

「A」著者わルッテスキ、マルク・ブロックを引證しつゝ、農業及び土地所有の形態「フランス」農業制度の型の把握をその研究の「礎石」に置き、更に「B」かゝる「型」の旋回の究明を問題とされる。

吾々わ封建社會の全經濟構造の礎石が新しい研究によつて明らかたされつゝある中世都市の發展にもかゝらず、尙農業にあつたこと更にそれが政治、思想の運動と相互に滲透し合ひ乍ら近代社會體制えと運動を開始したことわ何等異存がないが、個々の農業制度の「型」のつづり合せが、そしてどう云つた「型」の力學が、またわ機械的な「段階的・構造的」(一五〇頁)比

重が問題となるのでわない。

「商業資本の發展の程度わ産業資本の發展の程度に反比例する」とゆう「資本」の著者によつて樹立された法則(「レーニン」發達)岩波邦譯、下巻、一四六頁)わ決してかゝる單なる兩資本の力學的運動でわなく眞に兩者の決定的な「闘争」であることを忘れてわならぬ。

この過程わ(一)封建家臣團の分解と共に……(孤立農民經濟(1)ツンストの手工業の一部をも起點とする——筆者)新たなマニユファクチュアが、海港に、又わ舊來の都市やそのツンフ、制度の手の届かなかつた平地の諸處に設けられ……舊來の特權諸都市の激烈な抗争を醸し出す(エンゲルス版「資本」一巻七一六頁。傍點わ筆者)眞に革命的な過程から(二)高利貸資本、商人資本が直接に生産を制縛する蠅牛的進行の事態に至る迄に「マニユファクチュアが資本制生産方法の支配的形態となつてゐる時代にわ、マニユファクチュアの獨特の傾向を十分に發展せしめんとするとき様々の障害に逢着する」(エンゲルス版「資本」一巻、三三頁)ことを如實に物語つてゐる。

近代市民經濟學に在いて明確に近代物理學の成果をとり入れたアイザック・ニュートン・フィッシャー Irving Fisher, Mathematical Investigation in the Theory of Value and Prices. 1892

revised 1926) 又ハ・ヘンリ・ポアンカレに支持されたL・ワル
ン・(La lettre de M. Poincaré reproduite dans la note
de L. Walras intitulée "Economie et mécanique,"
cité par Antonelli, Léon Walras, dans la Rev. d'histoire
des doctrines, 1910. p. 117 et Principes d'économie pure,
pp. 66-7.) 及びヘンリ・ポアンカレが尙經濟學の深奥を把握し得ず、
ビグー、ヒックス、ハイエク又ハ・ケイ・インズにみる如き轉
落の路をたどつたとするならば正にそれは如何に精緻なもの
であらうとも「機械論」の一語につきざるであらう。(2)

史的探究に在いてこの著書はまさしくこの「機械論」の危機
にさらされてゐる。―ただ史的展開のケンランさが之をヴェー
ルするのみ。

(1) 「マニファクチュアの時代にわ土地の耕作を副業と
し、工業上の労働を主業として」「労働の生産物を直接に、又
ハ商人の手を経て間接に、マニファクチュアに販賣する所の
小農民とゆる漸なる階級がつくり出される。而してこの事
は、英國史の研究者をして最初に昏迷せしめる現象の主要原
因でないにしても、少くともその一原因となつてゐるのであ
る」(ミンケルス版、「資本」一巻、三三頁、傍點ハ筆者)。
「個別分散的なマニファクチュアハ大抵ハ小農業と結合する
ものであつてそれハ唯一の自由なマニファクチュアなのであ

る」(同三三頁傍點ハ筆者)。
(2) ウェー・ライバルトハマックス・ウェーバーの「古代農業史」
に就いて正當にも次のやうに述べてゐるマックス・ウェーバ
ーハ古代を資本主義と同「視」(cf. L. Brentano Das
Wirtschaftsleben der antiken Welt 1929 參照一筆者)。
するやうな平坦な現代化と無縁である。彼の見解ハ、まわ
めてデリケートである。……と云ふ、古代「都市封建主義」
および古代農奴制度の諸關係の理論ハ、まさにマックス・ウ
ェーバーその人から出て來てゐるのである。「前掲書二六頁」
M. ウェーバーの Wirtschaft und Gesellschaft, を讀み、
理論の精緻をわきまに近代諸社會科學の精隨である。

「第四編、近代的進化の二つの「體系」に就いて、―土地問
題に於ける對向的透視―」について。

「二つの體系」、これハレーニンによつて「アメリカ的道」
と「プロシヤ的道」として法則付けられたものである。だが俗
流マルクス主義者と異つて、事物を經濟主義的な狭いわくで捉
えることをしなかつたレーニンを以てわこの場合にも常に「
政治科學の適用である」又は「政治經濟の集中である」、更
に「一切の階級闘爭ハ政治闘爭としてあらはれる」とゆうこと
がその出發點をなす。

マルクス・エンゲルスハ「クリエに對する聲明書」の中で

農業改革を起點とするプロシヤ絕對主義の近代的君主制の偽
裝的裝置轉換の「一積杆である」。

「最後に第五篇、市民革命の構造展望、試論―フランス革命
史研究序説―」について。

著者が、封建的な母胎から生れてくる鬼子としての獨立小商
生産者ハ農村手工業者・獨立自營農民を克明にフランスの史實
に即して採出される限りに於いて、それは正しい方向付けと云
わねばならぬ。だがこの場合問題なのはイリニンが、一九〇五
年の革命のためにとつた分析方法(マルクスの資本論からの發
展、具體化の理論)が考慮されねばならぬ。この場合イリニ
ンハ、ナロードニキとの理論闘爭から出發して、市場論(一八九
三年)を以つて鋭く十九世紀末のロシア社會の發展方向の基本
的な方法論を確立した。イリニンの市場論ハ明確に、封建社會
から資本制社會への發展過程、法則性を規定する。この意味に
於いてこの理論ハ明らかにマルクスからの發展であり、且つナ
ロードニキ的な、アカデミックな、資本論研究と決定的にたも
とを分つものである。

この場合イリニンハ事實上の資料には多く觸れないで何より
も先づこの過渡期の基本的な資本發展の法則を確立した。だが
現實の過程ハ決してウェーバーの考ふるやうに純粹に貫徹され
るものでわない。例えばイギリスに於いてみられるやうに史實

ドイツからアメリカに移住した「眞正社會主義者」のヘルマン・
クリエを冷笑し、農氏の要求の小ブルジョア性を暴露したが、
しかし農氏運動の非常に進歩的な、革命的でさへある意義をみ
とめて、農氏の要求を支持した。(スターリン「レーニン主義
の諸問題」―農民問題に對する黨の三つの主要スローガンに就
いて「參照」)この問題ハ、その後レーニンによつて「マルクス
のアメリカ『階級論』とゆう論文でロシアのナロードニキ
「社會主義」の小ブルジョアの性質を暴露することに適用され
農民運動の歴史的革命的役割の原則がこゝに明示された。これ
こそレーニンが後に「プロイセン式」土地解決法(1)に對立させ
て、「アメリカ式」解決法と名づけたところのものである。

かゝる對向性の同一過程における包藏(從つてその闘爭發
展の物質的諸條件)こそ正にフランス革命の性格を決定する。

吾々わこゝ云つた史的法則ハ歴史のこの場面に必ず登場するこ
とを確認すると共にその要求が實踐的なものとして出てくる時
もはやアカデミシヤンの紙上の冗舌でわなくて身をもつてする
階級闘爭の眞只中で決定さるべき問題であり、アカデミシヤン
の想像を絶した綿密且つ周到な理論の陶冶を経ねばならぬこと
を知る。日本における民主革命の過程ハまさにこの事實を物語
つて餘りあるであらう。

(1) プロシヤ式土地解決法とハシュタイン、ハルデンベルヒの

の上からわわハイたる農村に於けるマニファクチュアの勃興を尋ねて検出することが出来る。だが問題はこの過程に於て出された矛盾・闘争にある。(1)

(註) この矛盾をレーニンの「市場論」又わマルクスの「實現の理論」に見つけ出そうとしたのわナロードニキだけである。

イリリンわこで「十九世紀末に於けるロシアの農業問題」「發達」等を通じて、この矛盾の發展の過程をその底を貫く明確な理論的法則の上に立つて具體化し、ロシア・ブルジョア革命の實踐上の指針を與えた。この理論的把握わロシアが遅れて居ればる程益々その重要性を加えてくる。「農業に於ける資本主義邦譯」白楊社、二四頁、二五頁

著者が、具體的な史實を捉え、理論を發展せしむるに當つてかゝる矛盾、物質的闘争の面を拾象されて、ウーバー的な「類型化」にのみ没頭するならば、もはや史學の發展を一面化し、固定化し、單なるウーバー史學の不斷のくりかえしに終らずを得なくなるであらうことを懸念するものである。

(二) この矛盾をレーニンの「市場論」又わマルクスの「實現の理論」に見つけ出そうとしたのわナロードニキだけである。

一九四二・五・二

アメリカ經濟に

關する三小著

山 本 登

終戦後、わが國においては當然の事ながら、各般の觀點からするアメリカ研究熱は極めて盛んである。アメリカ經濟についても、既に多くの論作が發表せられ、その中若干のものは、頗る示唆に富んでゐる。

しかし全般を通じて感ぜられることは、まだ多くの事が知られねばならないとの一事である。戦争といふ阻止的な要因が介在したことを考慮に入れるとしても、從來のわが國におけるアメリカ經濟に關する研究が、甚だ不備な乃至は停滞的な状態にあつたことを啗たざるを得ない。

戦後の世界經濟において主導的地位を占めると目されるアメリカ經濟の構造的特質、その實態或は動向について、尙歴史的にも又理論的、實證的にも分析が進められなければならない。この方面についての今後の組織的研究の遂行に多大の期待を懸けると共に、他面差し當つては、戦時中アメリカにおいて發刊

アメリカ經濟に關する三小著

せられた諸文献の紹介、輸入に大なる願望の寄せられてゐることを附記して置きたい。

終戦後わが國において公刊されたアメリカ經濟研究書は、時間的餘裕から云つても大部のものは望み難い實狀であるが、昨年中に刊行されたものの中から、次の三つの小冊子を選ぶことが出来る。(註)

一、都留重人氏著「米國の政治と經濟政策」(昭和廿一年五月再版「初版昭和十九年」有斐閣)。

二、鹽野谷九十九氏著「アメリカ經濟と經濟的民主主義」(昭和廿一年六月刊) 水谷書房。

三、小原敏士氏著「アメリカの通貨金融政策」(昭和廿一年十二月刊) 世界經濟調査會。

(註) この外に鹽野谷氏「アメリカ經濟の發展」(昭和十六年初版 日本評論社)が再刊されたが、歴史的發表の記述を中心とし、他の二著と多少趣を異にするので、茲では前掲書の方を選んだ。

いづれも戦時或は戦後の忽卒の間に筆に成つたものだけに、(例へば都留氏の著は戦時中、東大で行はれた特別講義の原案であり、小原氏のは世界經濟調査會へ提出された調査報告が主體となつてゐる)その一冊によつてアメリカ經濟の全貌の理解